

安岡章太郎「終末の言葉」再読

辻匠 (Taquimi TuZino; *personale familie*)

2011-04-26 初稿

※ここでは引用も含めて、「としへの假名遣」で表記する。

※ここでは引用も含めて、句読点は「. ,」として表記する。

安岡章太郎のエッセイに「終末の言葉」なるものがある。私は「高校生のための批評入門」(筑摩書房)といふいろいろな著者からなるエッセイ・評論集に入っていたのを高校時代に読んだ。ずっと忘れてみたが辛卯の年、如月の4の日(太陽暦)にふと、その書かれてみた言葉を思ひ出し、「高校生のための批評入門」を本棚からひっぱり出して読みなほした。原典は朝日新聞の1986年8月6日夕刊に発表されてゐる。また、「安岡章太郎随筆集」(巻5, 岩波書店)にも収められてゐる。興味をもった向きは是非読んでいただきたい。思ひ出した言葉は、

置き去りになった羊や鶏の面倒をだれが見るのか、

である。それを再び噛みしめる前に、ざっと「終末の言葉」の内容に触れておかう。これは11段落からなる小品で、

¶1 今世紀いっぱい地球は無事にもつだらうか、そんなことをこのごろ、かなり本気で思ふやうになった。(原典は現代仮名遣い。文頭の数字は段落番号。以下同じ)

といふ出だしではじまる。千年紀末への不安(千年紀のかはりめに天変地異のやうなものが起きるのではないかといふ不安)について言及する。が、その不安は単純な千年紀末への不安ではない。

¶2-3は千年紀末史観(?)に触れ、それはキリスト教の「御託宣」であり「キリスト信者でない私」には無縁と批判的に切り出してゐるが、最後は(おそらく意図的に)歯切れ悪く終わつてゐる。つまり、前の世紀末において、この世の終わりが来て、大審判が来る云々はキリスト教の坊さんが寄付あつめのために打ち出したキャンペーンであり、『そのころでも恐々のある人士は、かかる理念には影響されなかった。』と、ものの本には書いてある」としながら、改段後すぐに、「しかし、紀元千年に終末がくるかどうか、そんなことは現実にその年がきてみるまでだれにもわからなかつただずだ」と受ける。教養があらうとなからうと、世紀末が来るのは心の底では怯えてゐたに違ひないを彼は推測する。千年紀の後に、次々と建立・改築された寺院や教会に、理性を越えた恐怖が過ぎ去つたことへの感謝の意を氏は見る。そして氏はそれを否定しない。私はそれは知らぬこと知り得ぬことへの畏敬の念を見る。

¶4からはチェルノブイリの話になる。これは「終末の言葉」が発表された同じ年(1986)の4月26日に起きた原発事故である。氏は、放射能と「御託宣」とがもたらす恐怖について決定的な違ひ(放射線は実在するが御託宣は...?)をきちっと確認しながらも、共通点を見いだす。つまり、放射能は

¶4 ... 特殊の専門家を除いて、私たち一般の者には眼で見ることとも花で嗅ぎ別けることもできない¹。単に〇〇ピコ・キュリー²とかいふ記号を教へられるに過ぎない。その点、放射能は神の怒りに近く、専門的技士³は坊さんに似てゐるのである。

「一般の者」に理解できない点で、「十分に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない」といふクラークの言葉を連想するが、¶2-3を振り返ると、氏は、坊さんも同じくらい科学者もあやしく思つてゐるといふことであらう。これはおいおい明らかになる。

¶5では専門家の、ある意味「一般の者」には不毛な論争が紹介される。もし東海村でチェルノブイリのやうな原子力事故が起きたら「東京は確実に死の都市」になる、「いやチェルノブイリのやうな事故は東海村では起こりっこない、わがくにの原発はソ連みたいにお粗末なものではない」といふ論争である。この二つの意見は、論争的には噛み合つてゐないやうに見えるが、言明だけ見る限り実に噛み合つてゐる。つまり、両者を総合すると、「事故は起こらないが、起きたら確実に...」となつて矛盾はない。

¶6で、氏はそのどちらの専門家の言ふことも正しいと思ふ、とした上で、「一般の者」に話題を向ける。「一般の者」の代表者である氏自身である。事故が起きれば「東京が住めない都になることは本当」だが、「悲観的専門家を含めて」東京で暑い暑いといひながら暮らしてゐるのは、「チェルノブイリのやうなことはまず起こるまい、とタカをくくつてゐるからであらう」。「一般の者」はさうでなくても「日常茶飯に心配のタネが多過ぎるのである」。氏は「メニエル病」のためいつ眩暈がするか対処に余念がないさうだ。持病のある人、解雇の恐怖にさらされてゐる人、工房や店舗が閉鎖の危機にある人、実際に失業してゐる人、家庭崩壊の人、めぐられたはうなのかもしれないが仕事があまくいってゐない人、ローンの心配がある人等々...「一般の者」はいろいろ心配がある。「そんなだから、東海村のことまで心配してゐるヒマはない。」

¶7「かといつて」、氏は原発の心配をまったくしてゐないわけではない、と言ふ。氏もやはり《事故は起こらないが、起きたら確実に...》といふ結論に達してゐる。が、これは結局《事故は(ほとんど)起こらないが、起きたら確実に...》といふことなのだ。前件が成立する(事故になる)のは「百万分の1」かもしれないが、「いつ起きるかはだれにもわからないし、起こつた場合、測り知れない災害がもたらされることは決定的である。」気がつく、氏でなくても、

こんな危ないものを、どうして国中に何十カ所もつくつておくのか

といふ気がする。」であらう。一方で、「一般の者」である氏は、「原発がなぜ危ないか、放射能がどんな具合に恐ろしいのか、はっきりしたことは何一つわからない」と告白する。また一方で、

¹正確には「特殊の専門家」でも知覚はできない筈。舌先がイオン化してその味がするやうな強烈な放射線ならともかく、「特殊の専門家」も計器で知つてゐるだけ。知覚はしてゐない。新聞誌上のスペースの制約で文が切り詰めたか？

²ベクレルを同じ放射能を示す物理量だが単位が異なる。1キュリーは 3.7×10^{10} ベクレル(1ピコ・キュリーは 3.7×10^{-2} ベクレル)になる。

³技師？ 当時はかういふ用字だったのかも。

さういふことがチャンとわかってゐるはずの専門的科学者を、心の底では信用し兼ねてゐるのである。

と、この段落を終へる。この問題は思考の袋小路にはいつてしまふ。心配である。しかし技術的なことはわからない。わかってゐると自称する人がほんたうにわかってゐるのかもわからない(信用しかねる)。が、わかってゐると自称または他薦される専門家に対処してもらふしかない。が心配である(以降ループ)。これはどんなに技術的な理解が進んでもさうであらう。

¶8-10 は少し話題を変へて、科学の歴史と科学者の性(さが)についてのレビューである。「科学者は科学を進歩されることには熱心でも、それがもたらす災害については長い間、無関心であったやうだ」放射線については寺田寅彦の大正6年及び7年の論文でも触られてゐるが、人体や生物への影響については不明なままだ。一挙に30年後の昭和20年には広島と長崎に原爆が投下された。「これは驚くべき急速の発達といへるだらう」。が、「40年以上たったいま、放射能の害を食ひとめることでは、まだ全然見込みが立ってゐない様子だ」。彼はこの段落の最後でため息をつく。

要するに、原子核といふのはパンドラの箱であつて、いったんこれを開けると人間の知恵ではどうすることもできないものなのだらうか。

実際、核廃棄物の処分など悲観的な話題が目白押しだ。100万年間⁴の安定した保管を人類ができるのか...

¶11 そして(私にとっての)「終末の言葉」が来る。全段引用する。蛇足は不要不能である。

チェルノブリの事故のニュースで一つだけ感動したのがある。事故のあと、ソ連政府はチェルノブイリ周辺の住民に立ち退きを命じ、全員を遠くの安全地域に避難させた。ところがそれから一月もたつて、事故地域のある農村で、75歳と84歳の老婆が2人、納屋に隠れてゐるのが発見された。役人が、「おまえら、こんなところに隠れて何をしてゐるんだ。」と。問ひつめると、老婆たちはこもごも、「村のものは皆みなくなつちまつた。わたしらでも残つてゐないと、置いてかれた羊や鶏の面倒を、いったい誰が見るだね。」と。こたへたといふのである。老婆たちが立ち退きを拒んだ理由は、本当のところ何であつたか、私は知らない。ただ、置き去りになつた羊や鶏の面倒をだれが見るか、といふ一言に私は、何か震憾させられる想ひがしたのである。

⁴100万年といふのは、放射壊変による減少を見越した数字であり、また火山や地震などで近未来的に安全だといふことを示す確率的な数字でもある(つまり100万年の安定が保証できないやうなら、万が一の火山などで原子力災害になる可能性があるといふこと)。